

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884066

研究課題名(和文) 芭蕉連句における季吟の影響 季吟門連句の実態と「非季」の詞を中心に

研究課題名(英文) The study of influence from Kigin seen in the Basho Renku -the analyze mainly by the Kigin's community renku expression and "The words of Hiki (the word which isn't Season words)"-.

研究代表者

野村 亞住 (nomura, azumi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：30710561

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：申請者は、芭蕉連句の全容解明を目的に、本研究において、芭蕉の季語感の原点を探るべく、師と目される北村季吟の俳諧との比較を試みた。

具体的には、季吟の宗匠立機後、季吟が一座した連句、ごく親しい門弟の独吟連句をテキスト化し、句・季語・季節・興行時期・連衆などが一覧できるデータベースを作成した。その分析の中で、季吟門の季の特徴が抽出できた。これを、申請者が独自に蓄積した芭蕉一座連句のデータベースと比較したところ、芭蕉一座と共通するものであることが明らかになった。さらに、「非季」とされた言葉の分析からは、季の認定の基準が見えてきた。以上のように、今後の研究において大変有意義な研究成果を得られた。

研究成果の概要(英文)：My research purposes, is the whole picture elucidation of Basho Renku. I have tried comparison with Kitamura Kigin (He is regarded as a teacher of Basho.) Renku to look for the starting point of "Season words sense" of Basho. The details of this study are as follows.

First I text-ized Kigin Renku (I limited to after he became a Haikai master). And I made a phrase, Season words, season, time and the data base through which a collaboration person can glance. Next I analyzed this data base. As a result, I knew the feature of Kigin's community Renku. This was compared with a data base of Basho Renku I made in the past. Then both common points became clear. I understood one of a way of a seasonal decision in renku from an analysis of "The words of Hiki". I could get the outcome which leads to development of a study of my own future from this study like the above. This study was very meaningful.

研究分野：日本近世文学

キーワード：日本文学 近世 俳諧 連句 季語 季吟 芭蕉

## 1. 研究開始当初の背景

四季の変化や雑・人事などさまざまな事象を詠み込む連句は、前句から付句へと句中のことばの意味を変容させつつ展開される。複数の作者による連作でありながら、一巻全体には一貫したテーマはない。このように、連句が特殊な文学形態であることは、国際的にも注目を集めている。なかでも芭蕉の連句は、式目が整理され、形式的にも内容的にも完成した連句の典型とされている。『去来抄』や『三冊子』には、季語の生成や本意の刷新について弟子達と議論する芭蕉の姿勢がかいま見える。こうして深められた芭蕉の季語感、同時代のみならず、後代の俳諧、そして現代俳句にも大きな影響を与えている。

およそ二〇巻、七六〇〇句にのぼる芭蕉が一座した連句(以下、「芭蕉連句」と呼ぶ)は、全容解明が急務とされながらも、その量的問題などにより、研究が進まなかった。くわえて、作風の変化も激しく、連衆や興行時期の状況に左右されやすい連句は、分析が容易でない。そのため、連句については、作品ごとの分析や、注釈書類に終始しており、総合的かつ網羅的な研究が進んでいないのが実状である。

申請者はこうした未着手に近い連句を研究課題として取り組んできた。その手法は、芭蕉連句をテキスト化し、句・作者・季節・季語・興行時期・興行場所・連衆などが一覧できるデータベースを作成したうえで、その特徴を分析するものである。その分析ツールとして、申請者が注目したのが「季語」である。人事・釈教・恋・無常などといわれる連句における要素のなかで、連句で最も重要なものが季語であるといえる。しかも、句数の規定や句去などの季に関わる式目は、厳密に定められ、最も遵守されるべきものであったことは、実際の連句作品から明らかで、統計がとりやすく、比較的同じ条件での分析が可能であるため、比較研究に適しているからである。

従来、芭蕉研究も季語研究も、ともに発句の分析を中心に行われてきた。しかし、発句における季語の扱いと、連句におけるそれとの間には違いがあるのではないかという問題意識に立ったことが、申請者の研究の着想である。

こうした季語を分析の主軸とした実態調査からなる網羅的かつ総合的な研究手法により、申請者が現在までに蓄積した芭蕉連句のデータベースからは、発句には見られない季の扱いが明らかになっている。

## 2. 研究の目的

本研究は、芭蕉連句の全容解明を目的とし、季吟門連句との比較を通して、芭蕉連句の季の扱いの位置づけを検証するものである。

上記「1. 研究開始当初の背景」に記した

申請者のこれまでの研究により、芭蕉連句には以下の4点の特徴が明らかになっている。

- (1) 芭蕉発句と芭蕉連句とでは、季の扱いが異なること。
- (2) 連句に偏って詠まれる季語があること。
- (3) 同じ季語でも発句と連句では意味合いを読み分けていること。
- (4) 連句で使われることで定着した季語あること。

こうした芭蕉連句の季の扱いが明らかになったとき、申請者は、この季の扱いが芭蕉独自のものであるのか、それとも連句での季の扱い全般にわたるものなのかを明らかにすることで、芭蕉連句の全容解明につながるという見通しを立てた。

そこで、こうした芭蕉の季語感の原点を探るべく、本研究では、芭蕉の師と目される北村季吟に着目し、季吟の俳諧との比較を試みることとした。本研究においても、当時の季寄せ・歳時記類の記述から、ある程度一貫した分析が可能で、かつ、発句とはやや異なる用いられ方をする連句の中の季語に着目して、季吟の連句の実態調査を行うことで、芭蕉連句のさらなる分析を進めていく。

## 3. 研究の方法

季吟からの『俳諧埋木』伝授や季吟の著作物を参考にしたことなど、芭蕉に季吟からの影響があることは従来から指摘されている。

そのため、本研究期間においては、まず、季吟およびその門人たちの連句を調査して、比較分析のためのデータベースを作成することから取りかかる。

本研究においては、その概要を把握するため、季吟の宗匠立机とされる明暦2(1656)年以降に季吟が一座した連句・季吟の独吟連句・ごく近い門人たちの連句を対象とする(以下、これを「季吟門連句」と称する)。季吟門連句は、そのほとんどが未翻刻資料である。翻刻作業から始め、本文をテキスト化し、季語を一覧できるデータベースを作成していく。季語の抽出に際しては、当時の季寄せ・歳時記類・辞書や実際の作例等を参考に慎重に行う。データベース作成後には、語句のレベルで、頻出したもの、ほとんど使われなかったもの、使われ方が特殊なものなどを抽出し、その特徴の意味を検討する。その後、興行時期や連衆、作者、作品ごとの分析を行い、各特徴を明らかにする。

合わせて、俳諧作法書、季寄せ類の調査を行うことで、季吟の季語感を明らかにする。とくに、季吟が『増山の井』の中で「非季」の詞と分類したことばについては、連句における季の認定の基準と直接的に関わるため、多角度から分析を行っていく。

こうして得た季吟門連句の分析結果を申請者がこれまでに蓄積した芭蕉連句データ

ベースと比較することで、芭蕉連句における季吟の影響を精査する。これにより、芭蕉連句の季の扱いの位置づけを明らかにしていく。

以上、具体的な研究方法をまとめると、次の通りである。

- (1) 季吟門連句のデータベースを作成する。
- (2) 芭蕉連句のデータベースと季吟門連句のデータベースを比較分析する。
- (3) 合わせて「非季」と分類される言葉の調査を行う。

#### 4. 研究成果

本研究において得られた研究成果は大きく4点からなる。

- (1) 季吟門連句の季の扱いの特徴を見いだせたこと。
- (2) 上記(1)の特徴が芭蕉連句の季の扱いの特徴と共通するものであったこと。
- (3) 「非季」の言葉の解説に対する仮説が立てられたこと。
- (4) 上記(3)をもとに、申請者のこれまでの研究の集大成となる、学位論文『芭蕉連句の「季」の研究』を執筆し、芭蕉連句の季についての分析が完了したこと。

以下、具体的に記す。

##### (1)(2)について

「貞門俳諧」といえば、連歌との差異を模索した時期であり、伝統を意識した言葉の選び方をしているように思われる。季語に関しても伝統題を使用しているものという推測のもと、調査にとりかかった。だが、実際のデータからは、使用された季語の実態が必ずしも伝統題の使用に限ったものではないということがわかった。以下のような季吟門連句の季の特徴を見いだせた。

歳時記記載の季題・季語を、句全体で表しているものがある。

見慣れない季語を詠み込んでいたりするものがある。

季の句のはずだが、句中の季の詞がどの言葉と対応するのかが、一見して見えづらいものがある。

こうした特色は、芭蕉連句において見られた季の特徴と共通するものである。それが季吟門連句にも見られることが明らかになったことは、今後の研究において大変有意義な研究成果を得られたといえる。

なお、この問題については、次年度以降、継続して取り組んでいくつもりである。今回、本研究においては、季吟門連句に2つの限定をかけて調査を行っている。宗匠立机以降であること、門弟の範囲を限ったことである。今後、この2つの限定を解除す

ることで、こうした季吟門の季の扱いの形成過程と、季の扱いが継承された門弟の範囲およびその内容が明らかにできると考える。

また、本研究で行ったような季吟門連句の実態調査は、これまでのところ行われていない。俳諧研究の中心は芭蕉であり、発句であった。その他の俳諧師たちの、とりわけ連句に関しては、テキスト化すら進んでいないのが実状である。季吟は、著作の多い古典研究の側面が注目され、俳諧については芭蕉との師弟関係に限って研究されてきた。いうまでもなく、芭蕉の師と目される季吟の連句研究は、芭蕉研究を進展させうるものである。さらに、古典・和歌と幅広い業績を持つ季吟を研究することで、俳諧と和歌や古典との関係に対しても、新たな知見を開拓できると確信している。

芭蕉研究への影響もふくめ本研究の成果は俳諧研究を大きく進展させうるものである。将来的には、季吟同様に重要性が認識されながらも手つかずでいる他の俳諧師たちの連句の実態調査を行うことで、これまで明らかでなかった俳諧史の一面を明らかにできると見通される。

##### (3)(4)について

「非季」と分類される言葉の調査からは、連句における季の認定が、言葉であるのか一句の季の表現であるのかという問題が浮き彫りになった。連句の季の表現には、一見季語によるものでないよう見えるものがある。それは、発句における季題とそれを表現する季語の関係と同じであることが本研究において明らかになった。しかも、こうした季語を表現するために必要な構成要素として付随する言葉の有無についての言及が「非季」に記される解説(たとえば、「清水」であれば、「清水結ぶ」「清水汲む」などの言葉が必要であるという解説)であろうという仮説が立てられた。「非季」の言葉についての分析は、実際の作例の検証が必要不可欠であるため、さらなる調査が必要であると考え。季吟門連句の調査対象を広げる次年度以降も継続して行うものとする。

なお、この研究成果は、申請者がこれまで行ってきた芭蕉連句に関する研究の集大成となる学位論文『蕉風俳諧における「季」の研究』(2015年4月・早稲田大学)の分析において、大いに役立つものとなった。

以上が、本研究の研究成果の概要である。申請者がこれまでに行ってきた芭蕉連句の季の研究の総括に結びついたことをはじめ、今後の季吟門連句の研究の基盤となる研究成果が得られた大変有意義な研究であったと考える。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野村 亞住 (NOMURA, Azumi)  
早稲田大学 教育・総合科学学術院 助手  
研究者番号：30710561

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：